

2016年度 社会連携研究プロジェクト活動報告書

2017年 4月 28日

和光大学地域連携研究センター
センター長 小林 猛 久 殿

代表者氏名 常田 秀子

研究プロジェクトの名称 発達障がいのある学生の大学と地域コミュニティの参加に関わる試み (1 年目)						
研究目的 以下の2つを通して、大学における発達障がい学生支援のモデル作りと、効果の検証を行う。 ①発達障がいの特性理解やライフスキル獲得に特化した授業の中で、発達障がい学生が他学生と積極的に関わる機会を設けることを通して、大学コミュニティ参加に向けた支援モデルの作成する。 ②発達障がい学生が地域でのボランティア、インターンシップを行うことを通しての地域コミュニティ参加に向けた支援モデルを作成する						
プロジェクト所属メンバー (氏名の右の欄に、本学専任教員=教、共同研究員=共と記入してください。)						
常田秀子	教	辻あゆみ	共	三浦亜子	共	

<p>研究活動の経過 (800字以内) (打ち合わせ、報告、招待講演、調査旅行などの月日、テーマ、報告者、目的地などを記入してください。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトメンバー間での研究打ち合わせ・データ分析作業 (於: 和光大学常田研究室) 2016年5月30日、7月4日、7月20日、9月5日、10月3日 ・授業の実践 2016年度後期水曜2限「発達障がいと大学」 ・障害学生の学内コミュニティづくりの実践 (於: 和光大学) 2016年10月29日 ・教育心理学会にて研究発表 (於: 香川、報告者: 常田) 2016年10月7～10日 ・麻生区の就労移行支援施設との連携と、地域活動に関する打ち合わせ (学内にて) 2016年12月14日 ・発達心理学会にて研究発表 (於: 広島、報告者: 常田、辻、三浦) 2016年3月25～27日
--

研究成果の概要（1200字程度）（どのような方法で調査、研究を行ない、どのような新知見が得られたか。またそれを今後どのように活かすことができるか、など）

- ① 2015年度、2016年度の後期に行った「発達障がいと大学」という授業において、WHO が提言するライフスキルの諸領域に関わる自己理解を深めるを授業を行い、発達障害学生、定型学生相互に自身の課題についての意見を交換することを通して自己理解を深めることを促した。受講した学生からは、自分ことを初めて大学で話せてたのしかった（発達障害学生）、発達障害の困難を具体的に知ることができた（定型学生）などの感想があり、このような授業が、発達障害学生にとって大学を居場所とするための助けになると考えられた。
- ② 講義初回と最終回に、それぞれ、様々な領域における自己理解や障害理解のレベルについての自己評価を行ってもらったところ、障害学生も定型学生よりも相対的に自己理解の度合いが低かったが、いずれの学生においても講義最終回の方が自己理解が深まる傾向が見られ、自身の課題に対する具体的な対応の見通しをもてるようになっていた。また、発達障害学生は、自己の課題についてより深く考察するようになったためか、課題に取り組む自信は低下した。
- ③ 受講生の授業コメントを分析したところ、発達障害学生の授業コメントは定型学生のコメントに比較し、授業の内容と関連した自分自身の過去の経験や考えなどについての言及が少なく、授業内容を自分自身に関わることとして受け止める傾向が少ないことが示された。ただし、自分と関連づけながら授業コメントを書くよう指導を続けることにより、授業回数が進むにつれ、発達障害学生においても自己に関連づけたコメントが増えた。受講生に授業コメントを書かせる授業は多いが、これらの授業において、自己と関連づけたコメントを書くよう促すことを繰り返すことで、発達障害学生においても自己理解を深める可能性が考えられた。
- ④ 授業とは別に、有志の発達障害学生と定型学生数名で、発達障害学生が困難を感じやすいコミュニケーション場面を想定して（バイトのシフトを雇用主から強要される、など）、それぞれがどのように解決しているかを紹介しあい、いろいろな対処方法をロールプレイするセッションを行った。このようなソーシャルスキルトレーニングは発達障害学生、定型学生双方に好評で、今後組織的に継続することが望ましいと思われる。
- ⑤ 川崎市にある障害者就労移行支援施設「自然堂」と連携して、発達障害学生が実社会で社会経験を積むプログラムを検討中であるが、2016年度には実行に移すことはできなかった。発達障害学生は、いろいろな活動に積極的に参加する自信を持っていない場合が多いことから、安心できる人間関係の中でいろいろな経験を積むことは重要だと考えられるため、今後引き続き取り組んでいきたい。
- ⑥ 現在、多くの大学で、発達障害学生への合理的配慮や、学生相談などによる支援が模索されているが、大学に進学し、支援を求める発達障害学生の増加に追いつかない状態である。このような状況の中で、多くの授業において授業コメントを通じた指導を行ったり、発達障害に特化した授業を行うことなどを通して、大学での日常生活自体が障害支援につながることは意義のあることだと考える。

成果の発表文献（標題、著者名、雑誌名、巻号頁、発行年等）

（発行年は厳密に2016年4月～2017年3月に刊行されたものだけに限らず若干前後のものも含めてください）

授業による発達障害学生への支援、常田秀子、和光大学現代人間学部紀要第10号93～102ページ、2017年

大学に於ける発達障害支援—障害学生と健常学生の相互理解を深める授業を通して—、常田秀子・辻あゆみ、日本教育心理学会第58回大会発表論文集、2016年

授業による発達障害学生支援—授業コメントにおける発達障害学生の特徴—、常田秀子・辻あゆみ・三浦亜子、日本発達心理学会第25回大会論文集、2017年

※ 提出期限=2017年4月28日(金) 提出先=企画室企画係(担当:奥名)

※ 用紙が足りない場合は別紙を添付してください。

※ できるだけワープロで記入し、e-mailで送信してください。

※ kikaku@wako.ac.jp(企画係)